

断り場面における言いさし表現に関する考察*

- 言い切り表現との比較を通して -

小此木江利菜**
kor.m1610@gmail.com

<目次>

- | | |
|------------------|------------------------|
| 1. はじめに | 4. 結果及び考察 |
| 2. 先行研究と本研究の立場 | 4.1 言いさし表現と言い切り表現の使用様相 |
| 2.1 言いさし表現 | 4.1.1 言いさし表現 |
| 2.2 断り | 4.1.2 言い切り表現 |
| 3. 研究の対象と方法 | 4.2 スピーチレベルにおける使い分け |
| 3.1 言いさし表現の定義と範囲 | 4.2.1 丁寧体レベル |
| 3.2 断りと親疎関係の相関 | 4.2.2 普通体レベル |
| 3.3 分析の対象と方法 | 5. まとめと今後の課題 |

主題語: 言いさし表現(interrupted speech)、言い切り表現(iikiri speech)、断り(refusal)、スピーチレベル(speech level)、配慮(consideration)

1. はじめに

本研究では日本語母語話者の断り場面における言いさし表現を言い切り表現と比較し使用様相を考察する。言いさし表現とは文末に「ので」「けど」「から」のような接続助詞を付け発話をする文末表現の一つである。この表現は文を最後まで述べずに「話し手の意図を伝える」特徴を持つ(高:2019)。日本語の発話で文末まで述べる言い切り表現を使用すると冷たい印象を与える一方、言いさし表現は談話を和らげて相手に配慮した印象を与える(柏崎:2001)ため、日本語母語話者間で多用される。言いさし表現の例を挙げると以下の通りである。

* 이 연구 성과는 2021년도 고려대학교 4단계 BK21 중일교육연구단의 참여학생으로서 작성한 것임.
** 고려대학교 중일어문학과 대학원 박사과정

(1) A : これから2次会あるんですけど来ませんか?

B : 私、これから用事があるので

A : じゃあ、次の機会に

日本語における言いさし表現は断りや依頼などの特定の言語行動と結びつきやすい(三原:1995)。特に、断りは相手の意向に答えられない旨を伝える必要があるため、断り場면을対象にした「配慮言語行動」としての言いさし表現を分析する意義があると考えた。そこで本研究では日本語母語話者の言いさし表現を取り上げ、その特徴を考察することを目的とする。

2. 先行研究と本研究の立場

2.1 言いさし表現

言いさし表現に関する研究は、言いさし表現全体の談話機能に関する研究(岡田:1991、曹:2005、朴:2012)、その中で依頼場面や断り場面のような特定の場면을対象にした研究(伊藤:2006、村井:2009、吉井:2009、高:2019、日高:2012)、言いさし表現の「から」「けど」「が」「て」など、特定の形式を対象にした研究(高橋:1993、三原:1995、白川:2009)が挙げられる。

言いさし表現は「相手への配慮」を示し(岡田:1991、柏崎:1993、曹:2005、朴:2012)、文末まで全部言わないことは、単に言わなくてもわかるということだけではなく、待遇上の積極的な意味を持っている(岡田:1991)のに対し、文末まで述べる言い切り表現は「形態的に過不足ない統語的に完全な発話文」であり、「自分の態度を明確に示す断定表現」である(朴:2012)。また、言いさし表現は聞き手への遠慮の気持ちを示すとともに、聞き手の意向を窺ったり、相手にこちらの意向を察してもらえるように仕向ける機能を果たす(日高:2012)。

そのような観点から言いさし表現の丁寧度に着目した曹(2005)では、日韓のドラマ資料を対象に言いさし表現を取り上げ、スピーチレベルを「丁寧体レベル」「普通体レベル」に分類し分析を行っている。その結果、韓国語の言いさし表現は丁寧体レベルより普通体レベルで多く現れたのに対し、日本語の言いさし表現は普通体レベルより丁寧体レベルで多く現れた。このことから言いさし表現は韓国語では比較的丁寧度が低く、日本語では丁寧度

が高いことを示している。

2.2 断り

「断り」はストラテジーや談話展開に焦点を当てた研究が多く挙げられる(村井:2009、吉井:2009、朴:2012、高:2019)。

高(2019)では、断りを「人間関係維持のための配慮言語行動」として捉え、日本語母語話者と中国語母語話者の自然会話を対象に分析を行っている。その結果、日本語母語話者は「言われなくてもわかってもらえることがコミュニケーションの前提となっているため、察し合うことが重要視される」高コンテキスト文化を反映する一方、中国語母語話者は「言わなければ伝わらないことがコミュニケーションの前提となっている」低コンテキスト文化を反映していると日中の相違点を挙げている。

断りにおける聞き手の不快感に着目した村井(2009)では、日本語母語話者である大学生を対象に、聞き手が好感と不快感を決定する要因について調査を行っている。村井(2009)では「後輩」と「親しい友人」に対して断る場面を設定し、スピーチレベルからの考察を試みている。その結果「丁寧体」を使用した場合は好感を得られ、「普通体」を使用した場合は著しく不快感が高くなったとし、待遇表現の重要性を示唆している。また、調査対象者は断りの際に「理由表明」の重要性を認識している傾向が見られた。村井(2009)では、親疎関係を「後輩」「親しい友人」に限定していたが「親しい間柄にあっても年齢差があることもあり、年齢差と親しさは必ずしも対立するものではない」と親疎関係における分類の課題を残している。また、吉井(2009)では、親しさの度合いが低くなるほど関係の修復を試みるため、断り発話が長く現れる一方、親しさの度合いが高い相手には関係修復を積極的に行わなくても、ある程度関係の維持が保証されると述べている。

以上の先行研究から日本語の断り場面において、言いさし表現は聞き手に対する配慮が含まれ丁寧度が高く、また、話し手と聞き手の関係により断る際の発話に相違が見られることがわかった。「言いさし表現」「断り」「スピーチレベル」における個々の知見は得られているが、これらの組み合わせが実際の言語行動にどのような影響を与えるのかに関する研究は管見の限り見当たらず、聞き手に対する配慮が必要な「断り」で見られる言いさし表現をスピーチレベルの観点から分析する意義があると考えた。そこで、本研究では言いさし表現を「配慮言語行動」として捉え、日本語母語話者の断り場面を対象に、どのような関係の場合に言いさし表現が使用されているのかを中心に検討する。本研究の課題を整理する

と以下の2点である。

- 1) 断り場面における「言いさし表現」の使用様相を「言い切り表現」と比較し分析する。
- 2) 観察された各表現を「丁寧体レベル」「普通体レベル」の關係に分類し、それぞれの特徴を考察する¹⁾。

3. 研究の対象と方法

3.1 言いさし表現の定義と範囲

本研究で扱う言いさし表現の定義は以下2点を満たす表現である。

- 1) 文を言い切り表現として完成させずに接続助詞で終わらせている発話

高橋(1993)は言いさし表現を、(1)接続助詞「けど²⁾・が・から³⁾・し」で終わる文、(2)条件形「ば・たら・と⁴⁾」で終わる文、(3)第二中止形「て」で終わる文、(4)引用助辞「って」で終わる文に分類している。本研究では、高橋(1993)で挙げられた形式で発話を終わらせる発話を言いさし表現とし取り上げる。

- 2) 話し手が伝えたい内容が含まれている言い終わりの言いさし表現

言いさし表現の定義に関して白川(2009)は、言いさし表現をさらに「言い終わり」「言い残し」の2つに分類している。「言い残し」は「今日は…」のように「言うべき後件を言わずに途中で終わっている文」である一方「言い終わり」は「今日は、予定があって行けないんですけど」のように「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」であり「完結した内容を備えた」

-
- 1) スピーチレベルの分類「丁寧体レベル」「普通体レベル」は曹(2005)の用語を参考にする。
 - 2) 高橋(1993)が提示した言いさし表現(1)の接続助詞「けど」は、類似表現に「けれど」「けれども」という形式がある。これらの形式は語彙的には異なるが、本質的には同一な意味を持つため本研究の対象含め分析を行う。
 - 3) 本研究では「から」の類似表現として、理由・原因を表す「ので」を調査対象として含める。
 - 4) 本研究では「ば・たら・と」の類似表現として、条件形を表す「なら」を調査対象として含める。

文であると説明している。本研究では話し手が聞き手に伝えたい内容を含めている「言い終わりの言いさし表現⁵⁾」を「言いさし表現」と称し分析を行う。

また、言いさし表現の倒置的用法に関して白川(2009)では「いい、車で来てるから。」のような表現は、前件と後件を入れ替えると「車で来てるから、いい。」となり、話し手が伝えたい内容が文脈に全て表出され完結しているものがあると説明している。このような表現は「倒置的用法」に分類され、文末の形式は言いさし表現であるが、言い終わりの言いさし表現とは異なる性質を持つとしている。白川(2009)は、このような発話は言い終わりの言いさし表現には含めず「倒置的用法」として扱っている。

言いさし表現の倒置的用法に関して、曹(2005)においても「来るって言ってるわよ、1時間ぐらいで。」のように前の発話を補足するような倒置的な言いさし表現は分析の対象外としているが、以下のような発話は分析対象に含めている。

- (2) A: 居ていいのに
B: いえ、打ち合わせの邪魔したらあれなので (風のお暇[4])
- (3) A: そんなこと言わないでフレンチトースト作ったから食べない?
B: いらない、病院行かないと (大恋愛[5])

(2)の断り「いえ、打ち合わせの邪魔したらあれなので」は直前の発話「いえ、」を補足する発話であるが、前件と後件を入れ替えると「打ち合わせの邪魔したらあれなので、いえ。」となり不自然な発話になる。(3)の「いらない。病院行かないと」の発話も同様の理由で本研究では倒置的用法とは認めず、言いさし表現に含め分析を行う。

3.2 断りと親疎関係の相関

「断り」行為は相手の希望や要望に添えない意志の表明である(村井:2009)。相手の希望や要望通りに動くことができないため、蒲谷、他(2009)では、このような言語行動は「数々のマイナス点を補う必要がある」と述べている。つまり、断る際に「相手が納得するように理由を述べる」「できないことを十分納得しているかどうか」に関する説明を述べることもコミュニケーションにおいて大事な要素だとしており、「理由説明を丁寧に行うことが望まし

5) 曹(2005)では、発話内に述部が存在する言いさし表現を「述部有り」の用語を用い説明している。

い言語行動になる」と、理由を付加した際の断りの丁寧度を説明している。

断りの親疎関係に関して村井(2009)では「親しい間柄にあっても年齢差があることもあり、年齢差と親しさは必ずしも対立するものではない」と話し手と聞き手の関係における分類の課題を残している。このことを踏まえ、本研究では親疎関係をスピーチレベル別に「ですます体」を使用する関係を「丁寧体レベル」、「だ体」を使用する関係を「普通体レベル」に分類する。丁寧体レベルは、話し手より聞き手が年上や目上の場合、また、心理的には遠い疎の関係である相手に対して使用し、普通体レベルは、話し手より聞き手が同等・目下・年下の場合や、心理的には近い親の関係である相手に対して使用する関係と捉える。以下、親疎関係を「丁寧体レベル」「普通体レベル」と称する。

3.3 分析の対象と方法

本研究では、日本のドラマ資料で見られる「断り」を対象に分析を行う。日本のドラマで表れるセリフは自然会話と近く、また、コーパスや会話資料より、対人関係の親疎が分かりやすく分類できると判断した。ドラマの選定は2013年以降に日本で放送された以下6本のドラマであり、特徴的なキャラクターや方言・歴史が多く現れる資料は分析の対象から除外し、日本語母語話者の自然会話に近いものを選定した。ドラマ資料の内訳を<表1>に示す。

<表1> 分析資料

資料		放送年度	対象
1	最高の離婚[最]	2013	1話~11話(594分)
2	斉藤さん2[斉]	2013	1話~10話(540分)
3	過保護のカホコ[過]	2017	1話~10話(600分)
4	カルテット[カ]	2017	1話~10話(540分)
5	大恋愛[大]	2018	1話~9話(486分)
6	風のお暇[風]	2019	1話~11話(594分)

分析の方法は、上記した日本のドラマ資料全61話の断り場面から観察された文末表現を取り上げ使用様相を分析する。まず「明日は、予定があるので難しいんですけど...」のような「言いさし表現」と「明日は、予定があるので行けません」のように文末まで述べる「言い切

り表現」を観察し、どのような割合でそれぞれの表現が使用されるかを調査する。その中で観察された各表現を、スピーチレベル別に分類し特徴を考察する。なお、発話中に聞き手の割り込みにより話し手の意志に反して言いさし表現になった場面、また、メールなどの文面で断りが見られた場面は分析の対象から除外した。理由は、本研究では断り場面で見られる話し手の言いさし表現使用の意図を見るためである。

スピーチレベルの分類に関して曹(2005)では「親しい同僚、同級生の間では授業や会議など場の公式性に規定されて丁寧体が使われる場合」もあり「話者はさまざまな要因やその場の状況によって「丁寧体」「普通体」を選択しており、話者自身のその場への認識が反映されている」と説明している。本研究においても「その場への認識が反映されている」と捉える発話は分析対象に含め、普通体レベルである関係が丁寧体で発話をしたり、皮肉などの意味合いでスピーチレベルシフトが見られた場合は分析の対象から除外した。

4. 結果及び考察

4.1 言いさし表現と言い切り表現の使用様相

日本のドラマ資料全61話の断り場面を対象に、言いさし表現と言い切り表現の出現度を分析した。結果は以下<表2>の通りである。

<表2>断り発話における文末表現様相

形式	回数(%)
言いさし表現	156回(47.3%)
言い切り表現	174回(52.7%)
計	330回(100%)

観察された断り場面は計330回である。その中で、言いさし表現が156回(47.3%)、言い切り表現が174回(52.7%)見られ、断り場面において言い切り表現が多く使用されることがわかった。

4.1.1 言いさし表現

まず、156回(47.3%)観察された言いさし表現の例は以下の通りである。

<例1>

No.	発話者	発話内容	形式
1	大庭	斉藤さん、この後お茶でもしません?	
2	斉藤	私、午後は冴ちゃんの赤ちゃんの面倒見るって約束してるんで	言いさし表現
3	大庭	え~。	
4	大庭	よかったら一緒に面倒見ましょうか?	
5	斉藤	大丈夫です。	

(分析資料[斉])

<例1>は友人である大庭が「この後お茶でもしません?」とお茶に誘い、斉藤が「午後は約束がある」と断る場面である。「午後は冴ちゃんの赤ちゃんの面倒見るって約束してるんで行けません。」と言い切り表現を使用すると、聞き手に対して冷たい印象を与える(柏崎:2001)ため「約束してるんで」と言いさし表現で文末を和らげ発話を終えていることがわかる。

高(2019)によると、断り場面で現れる言いさし表現は「聞き手が話し手の意図を察しやすくように配慮」を示す機能があるとしている。[発話2]で「約束してるんで」と理由を述べることで「お茶には行けない」ことを聞き手が察しやすくように仕向ける話し手の意図があることが伺える⁶⁾。斉藤に断られた大庭は[発話3]で「え~。」と言い[発話2]が断りであることを理解している。高(2019)ではこのような談話を「察し合い」として説明しているが、これは「気配り発話や断る前に一時的に容認を表す緩衝材の使用により相手を傷つけない配慮を示し、察しの仕向けと察しの返しを兼ねた」配慮言語行動の特徴であると述べている。

4.1.2 言い切り表現

断り場面の中で174回(52.7%)観察された言い切り表現の例を以下に示す。

6) 日高(2012)においても、話し手が相手に意向を察してもらえるように仕向ける機能を「察しの仕向け」として説明している。

<例2>

No.	発話者	発話内容	形式
1	弘高	あなたが斉藤さんですか?	
2	斉藤	えっ、ああ、	
3	弘高	こいつあなたの大ファンみたいです。	
4	摩耶	ちょっと変なこと言わないでよ。	
5	弘高	ごめんごめん。あつ、お茶でもどうですか?	
6	斉藤	ありがとうございます。でも息子が待っているの、今日は失礼します。	言い切り表現

(分析資料[斉])

<例2>の弘高と摩耶は夫婦であり、家まで摩耶を送ってくれた斉藤に対して、家にあがってお茶でもどうかと誘い、斉藤が断る場面である。[発話6]で斉藤が「今日は失礼します。」と言い切り表現を使用し断っている。言い切り表現に関して朴(2012)では「自分の態度を明確に示す断定表現」であると述べている。断り場面において言い切り表現が多く見られた理由は、話し手が言い切り表現を選択し自らの意志と態度を明確に示すことを優先したためだと考えられる。よって、[発話6]のような言い切り表現は言いさし表現より丁寧度が低いといえる。

本研究で言い切り表現が多く見られた理由は「断り」が「相手の希望や要望に添えない旨を伝える」言語行動であるためだと考えられる。つまり、既に上述したように話し手が「配慮としての言いさし表現」では伝えきれない「話し手の意志と態度」を優先させた結果、断定的な言い切り表現が多く見られたということである。この結果から話し手は断りの際に、断る相手との関係により「言いさし表現」と「言い切り表現」を使い分けることが考えられる。以下の章では、スピーチレベルによる使い分けの結果を見る。

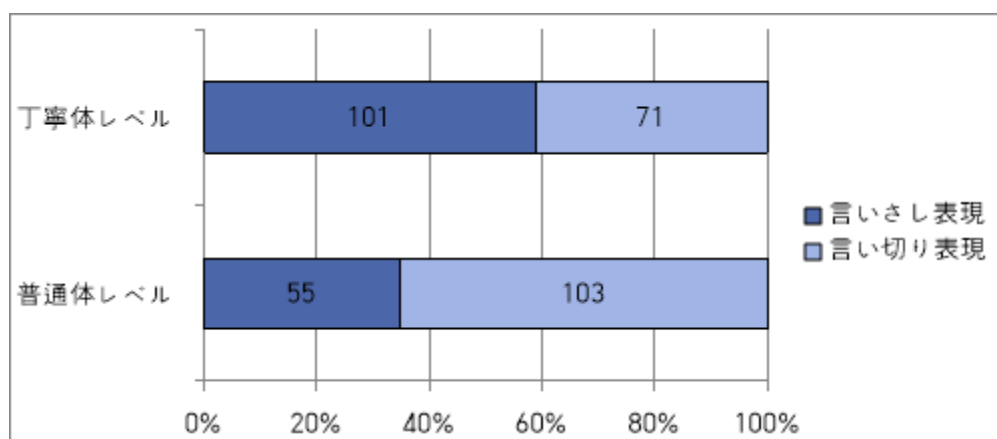
4.2 スピーチレベルによる使い分け

観察された「言いさし表現」と「言い切り表現」をスピーチレベル別に分析した。結果は以下の通りである。

<表3>スピーチレベルによる使用様相

形式	丁寧体レベル	普通体レベル	計
言いさし表現	101(58.7%)	55(34.8%)	156(47.3%)
言い切り表現	71(41.3%)	103(65.2%)	174(52.7%)
計	172(100%)	158(100%)	330(100%)

(単位:回)



<図1>スピーチレベルによる使用様相

<表3><図1>の結果から、丁寧体レベルでは言いさし表現が101回(58.7%)、言い切り表現が71回(41.3%)観察され、丁寧体レベルにおいて言いさし表現が多く使用されることがわかった。一方、普通体レベルでは言いさし表現が55回(34.8%)見られたのに対し、言い切り表現は103回(65.2%)であり、出現度の差が顕著に現れた。このことから曹(2005)の言及通り、日本語の言いさし表現は丁寧体レベルである疎の関係で多用される結果が得られた。丁寧体レベルで見られた言いさし表現の結果を以下の章で考察する。

4.2.1 丁寧体レベル

「丁寧体レベル」は「ですます体」を使用し、話し手より聞き手が年上や目上の場合や、心理的には遠い疎の関係である。丁寧体レベルで見られた言いさし表現の例は以下<例3>の通りである。

<例3>

No.	発話者	発話内容	形式
1	安良城	そう、バーベキュー	
2	大島	せっかくですけど、私バーベキューはちょっと...それに友達との集まりを邪魔しちゃ悪いですし	言いさし表現
3	安良城	平気平気、メンツ俺一人	
4	大島	え?	

(分析資料[岡])

断りは親しさの度合いが低い相手になるほど、遠回しな表現を使う傾向にある(吉井:2009)。伊藤(2006)は、断りにおいて言いにくい事を口にする時、その後の人間関係に影響を及ぼさぬように、短い表現で済むことをあえて長い表現を選択すると説明している。<例3>の[発話2]において、「せっかくですけど...」や「せっかくですけど、私バーベキューはちょっと...」などと答え、断りを短く終えることもできるが「それに友達との集まりを邪魔しちゃ悪いですし」と言いさし表現を使用し断る「理由」を述べており、伊藤(2006)の言及通り長い表現を用いることにより、丁寧さを付加していることが伺える。

また、言いさし表現「し」の機能に関して白川(2009)では「ほかの文内容と関連づける談話的な機能」があるとし、理由を述べる場合「し」を文末に付け加え、発話することによって話し手の心的態度を表明する機能があるとしている。[発話2]においても「悪いですし」と発話を終わらせ直前の文に対する理由を述べているが、これも話し手の心的態度の表明だと捉える。接続助詞「し」で終わる断りの言いさし表現は他にも「いやいやいやいや、無理です。私、免許取ったのもう何年も前ですし」のような例も観察された。直前の発話を補足する例は「し」に限らず「え、無理ですよ。いろんなところが痛いんで」「すみません。今ちょっと手離せないんですけど」のように「ので」「けど」の形式も多く見られた。

断りの発話内において「今日はちょっと用事があるので」のように言いさし表現と副詞「ちょっと」が多数共起していた。「ちょっと」は、相手に配慮し「理由」の内容を和らげる効果があり(カノックワン:1997)、山岡、他(2018)においても「ちょっと」は配慮表現として完全に慣習化していると述べている。本研究から、丁寧体レベルにおいて言いさし表現と「ちょっと」の共起が多数見られたことも「断る」という言語行動に丁寧さを付加し、「配慮」と同時に「断りを察してほしい話し手の心理」があるためだと考えられる。以下の例も丁寧体レベルで見られた言いさし表現である。

<例4>

No.	発話者	発話内容	形式
1	上原	飲みに行きますか?	
2	濱崎	いや、いいです。僕、お酒好きじゃないんで	言いさし表現

(分析資料[最])

言いさし表現を使用する理由に関して曹(2005)では「柔らかい言い方をしたい時に用いる」と述べている。<例4>において「いや、いいです。」と断定し発話を終えることもできるが「僕、お酒好きじゃないんで」と直前の発話を補足しながら言いさし表現を使用していることがわかる。話し手が断定的な断りを避け、柔らかい言い方で伝えたい話し手の心理から言いさし表現を選択したと同時に、言いさし表現は前の発話を補足する機能も持ち合わせることがわかる。話し手はこれらの機能を用い、聞き手に対する丁寧度を上げているといえる。

<例5>

No.	発話者	発話内容	形式
1	坂本	さあ行きましょう大島さん。	
2	大島	なんで?なんで?お茶しておしゃべりするって話じゃ	
3	坂本	お茶やおやつも出ますし、女性は参加費安いですよ。	
4	大島	あの、坂本さん。お気持ちだけ有難くいただきます。私、本当に、本当に、こういう場面が苦手で	言いさし表現
5	坂本	分かります。気後れしちゃいますよね。安心してください。大島さんの分も、私がエントリーしておきましたから	

(分析資料[風])

日高(2012)では、断りの前段階で「いつ?」「今?」という驚きの反応を示すことにより依頼に応じることができないことを予告的に暗示し、また「今、手離せない」のように自らの「状況を説明することで、相手に察してもらえるように仕向ける」言語行動であり、これを「断りに向かう談話上の予告」と説明している。<例5>の[発話2]において大島が「なんで?なんで?」と聞き返すことにより、驚きの反応を予告的に相手に示し、[発話4]で「私、本当に、本当に、こういう場面が苦手で」と自らの状況を説明しつつ言いさし表現を使用し、断りを表明している。これは、短い表現が選択されるところを敢えて長い表現を選択し、コストをか

けていることを示すことで、話し手は聞き手に対し厚く遇していることを伝える(伊藤2006)表現になる。

また、断る側の関係修復の配慮言語行動に関して、日高(2012)では「相手の意向にできるだけ添いたいという『誠意』を伝える」傾向があると述べている。つまり「お気持ちだけ、有難くいただきます。」と述べた後に「でも、こうゆう場が苦手で」と付け加え補足することで、誠意を示しつつ断っていることがわかる。丁寧体レベルの関係では、理由と言いさし表現が共起する例が多く見られたが、以下の<例6>のように話し手が自らの状況を説明する断りと言いさし表現が共起している発話も観察された。

<例6>

No.	発話者	発話内容	形式
1	上原	濱崎さん、(ダーツ)一緒にやりましょうよ。	
2	濱崎	いやいや。僕はあのう、指があれしてるんで	言いさし表現
3	上原	いや、大丈夫です。勝負しましょう。	

(分析資料[最])

吉井(2009)は「親しさの度合いが低い相手になるほど、遠回しな表現を使う傾向」が見られるとしている。丁寧体レベルで見られた言いさし表現は比較的断定を回避した「遠回しな表現」を用い、断る理由と説明を付け加えることにより、丁寧度を上げていることがわかった。また、言いさし表現を使用することで聞き手に断ることを察してほしい話し手の心理が含まれている発話が多く観察された。

続いて、丁寧体レベルで見られた言い切り表現の例は以下の通りである。

<例7>

No.	発話者	発話内容	形式
1	坂本	大島さん、一緒に幸せになろう。	
2	大島	いらないです。浄化されなくていいし、仕事も自分で見つけます。私はこの石に全く興味がありません。	言い切り表現

(分析資料[風])

<例8>

No.	発話者	発話内容	形式
1	間宮	この頃、鍵を挿したまま忘れたり、約束を覚えていなかったり というところがあるので、今はどんな状態でどんな治療をしている のか、俺も知らないといけなそう思ひまして	
2	井原	正式なご主人ですか？	
3	間宮	いいえ。	
4	井原	ご家族でなければお話しすることはできません。	言い切り表現

(分析資料[大])

<例7><例8>は丁寧体レベルで見られた言い切り表現である。<例7>は初対面の相手に断る際に言い切り表現として現れた場面であるが、断る際の配慮に関して伊藤(2006)では、聞き手との人間関係を判断した後、その関係性をその後も維持していくのに必要な配慮に即した言語表現を選択する過程で生じるものだと述べている。<例7>の関係性は初対面であるが、[発話2]で大島が自らの意志と態度を明確に示しており、関係性の維持を考慮しない断りだと捉える。

また<例8>は、間宮が交際相手の病名を主治医である井原に聞き、井原が「戸籍上の家族ではないため、病気の詳細に関しては教えられない」と断る場面である。[発話1]で間宮が「今はどんな状態でどんな治療をしているのか」と聞いたが、[発話4]で井原が「答えられない」と言い切り表現を使用し、はっきりと断っている。断りの言い切り表現は、断定することで話し手が自らの意志と態度を優先し断りを実現しやすくさせることが伺える。本研究で観察された丁寧体レベルの言い切り表現は、断りの負担度とも関連していると考えられるが、丁寧体レベルの言い切り表現は用例が少なかったこともあり、断りの負担度に関する詳しい考察は今後の課題としたい。

4.2.2 普通体レベル

「普通体レベル」は「だ体」を使用し、話し手より聞き手が同等・目下・年下の場合や、心理的には近い親の関係である相手に対する関係である。普通体レベルで見られた言いさし表現の例は以下の通りである。

<例9>

No.	発話者	発話内容	形式
1	正高	カホコも夕飯まだだろ?ママが用意してくれたから一緒に食べないか?	
2	カホコ	あ、大丈夫、あの、おなかすいてないから	言いさし表現

(分析資料[過])

言いさし表現は「聞き手に対する配慮」として論じてきたが、ここでは心理的距離が近い普通体レベルにおいて言いさし表現が見られた理由について考察する。断りに関して村井(2009)によると「親しい間柄であっても相手に対して思いやりが求められている」と述べている。言い換えると、心理的に近い関係であっても、言いさし表現を使用しつつ相手に対する配慮を示すということである。断りとして同じ命題を言い表すなら、長い表現より短い表現のほうが効率的である(伊藤2006)。しかし、<例9>では「あ、大丈夫。」と言い切って発話を終わらせず「あの、お腹すいてないから」と理由を述べ、直前の発話を補足していることがわかる。普通体レベルでは、<例9>のように直前の発話を補足する言いさし表現が多数観察された。

<例10>

No.	発話者	発話内容	形式
1	潤一	学校帰りは買い食い禁止だよ。	
2	雅也	お前らにもあげるわ、な、食べろよ、遠慮すんなよ。	
3	潤一	いい、いらない、それはダメだから	言いさし表現

(分析資料[斉])

<例10>は、学校帰りに雅也に「買い食い」を進められ、潤一が「いい、いらない、それはダメだから」と断る場面である。吉井(2009)によると「親しさの度合いが高い人に対して断る際には、末尾で関係修復を行う」傾向があるとしている。普通体レベルで接続助詞「から」の形式が多く見られたが、言いさし表現として現れる「から」は「行為の理由」を表し(白川:2009)、白川(2009)では「から」のみで答えると、座りが悪くなることがあることを指摘している。実際に、丁寧体レベルより普通体レベルにおいて「ちょっとやめてよ。糸だっているし、パパ

7) 白川(2009)では「カラ節」として説明している。

の世話する余裕なんかないから」のように「から」で終わる言いさし表現が多く観察されたが、普通体レベルの関係で「から」が多く見られたことは、配慮の度合いが低い関係と深く関わっていると考えられる。普通体レベルにおいて言いさし表現「から」が多数観察されたが、考察のためにはより多くの用例を集める必要があるため「から」に関する考察は今後の課題としたい。

以下は、言い切り表現として見られた例である。

<例11>

No.	発話者	発話内容	形式
1	大島	今日うちおいでよ。一緒にゲームやろ。	
2	うらら	ごめ一ん。お母さんとお菓子作る約束してるの。	言い切り表現

(分析資料[風])

断りに関して吉井(2009)は、親しさの度合いが高い相手には関係修復を積極的に行わなくてもある程度関係の維持が保証されていると述べているが<例11>の[発話2]において「ごめ一ん。」と言ったあとに続けて「お母さんとお菓子作る約束してるの。」と断りの理由を述べていることがわかる。<例11>のように直前の発話を補足する発話も吉井(2009)で説明されている関係修復と捉えることができるが、普通体レベルにおいて<例11>のような発話も多数観察され、関係修復は積極的に行われているのではないかと考えられる。

以上の結果から、断りにおける「丁寧体レベル」と「普通体レベル」で共通して見られた言いさし表現は「聞き手に対する配慮」と「直前の文を補足する」ために使用する断りが目立っていた。丁寧体レベルにおいて「断りを察してもらいたい」話し手の心理があり、普通体レベルにおいても「親しい間柄であっても聞き手に対して配慮する」話し手の心理があると考えられる。一方、言い切り表現は、配慮の度合いが言いさし表現より低く「話し手の意志と態度」を優先させた発話であることがわかった。

最後に「配慮」が見られなかった断りの言い切り表現を以下に示す。

<例12>

No.	発話者	発話内容	形式
1	斉藤	折り紙しようよ。	
2	潤一	折り紙なんかしない。	言い切り表現

(分析資料[斉])

<例13>

No.	発話者	発話内容	形式
1	弘高	ちゃんと説明しろ。	
2	拓海	無理。	言い切り表現

(分析資料[斉])

<例12>は、息子である潤一が母親である斉藤に対して断る場面であり、<例13>は息子である拓海が父親である弘高に対して断る場面である。断りの際に、きっぱりした言い方をすると、相手の意向に添えない旨が直面に出てしまう(吉井:2009)ため、丁寧体レベルにおいて、このような発話はあまり見られなかった。吉井(2009)では「親しい友人においては、信頼関係が築かれているため、はっきり断っても人間関係に与える影響が少ないと考えている人が多い」と説明し、吉井(2009)の調査においても、親の関係である家族⁸⁾に対する断りに関して「気を遣わずに言えるから」という話し手の心理があることを報告している。このことから普通体レベルで見られる言い切り表現は、聞き手との関係や、配慮などを考慮しない丁寧度が低い発話だといえる。

実際に家族間で見られた断りは言い切り表現が多く、「無理」「嫌だ」「行かない」など、丁寧体レベルより短く、結論のみ述べる発話が多数観察された。しかし、普通体レベルの中でも「友人」や「家族」など親しさの度合いに差が見られ、断りは親しさと深く関係していることが伺える。本研究では「丁寧体レベル」と「普通体レベル」の2つに分類し考察を行ったが、「普通体レベル」の中でも「友人」や「家族」など、親しさの度合いに焦点を当てた分析は今後の課題としたい。

5. まとめと今後の課題

本研究では、言いさし表現を「配慮言語行動」と捉え、断り発話における言いさし表現の使用様相をスピーチレベル別に考察した。結果をまとめると以下の通りである。

- 1) 断り場面において「言いさし表現」より「言い切り表現」が多く使用されることがわかつ

8) 吉井(2009)では「母親に対する断り」として説明している。

た。これは「断り」という言語行動において、話し手が言い切り表現を選択し、自らの態度と意志を明確に示すことを優先した結果だと考えられる。

- 2) 観察された各表現をスピーチレベル別に見ると「丁寧体レベル」では言いさし表現が多く、「普通体レベル」では言い切り表現が多く観察された。このことから言いさし表現は丁寧度が高く、言い切り表現は丁寧度が低いといえ、先行研究を支持する結果となった。
- 3) 「丁寧体レベル」で見られた言いさし表現は聞き手に対する「配慮」と「断りを察してほしい話し手の心理」があることがわかった。また、話し手は言いさし表現に加え、断る理由や説明を付け加えることにより、丁寧度を上げて発話をすることが伺える。
- 4) 「普通体レベル」で見られた言いさし表現は、村井(2009)の「親しい間柄であっても相手に対して思いやりが求められている」という言及通り、心理的に近い関係であっても言いさし表現を使用し、聞き手に対する配慮を示していた。

以上の結果から、断り場面における言いさし表現を言い切り表現と比較し分析することで、従来行われた研究の観点では観察できなかった使用傾向を示すことができた。本研究では、断り場面における言いさし表現の使用様相をスピーチレベルの観点から考察したが「断り」の負担度別考察や、男女別考察、聞き手の反応や察しに関する分析まで至らなかった。また、本研究では断り場面を対象に分析を行ったが「誘い場面」「依頼場面」においても同様の傾向が見られるのか、また、場面別に見られる言いさし表現を形式別に考察することで新しい見解が開かれると考えられる。それらに関する考察は今後の課題としたい。

【参考文献】

- 伊藤恵美子(2006)「日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか」『異文化コミュニケーション研究』18、神田外国大学、pp.145-160
- 岡田安代(1991)「日本人は、なぜ文末まで言わないのか? -会話を成り立たせる『共話』の原理」『月刊日本語』4、アルク、pp.9-13
- 柏崎秀子(2001)「談話の展開と表現が聞き手の印象評定に及ぼす影響-「実験語用論」の試み」『東京工業大学留学生センター年報』5、東京工業大学留学生センター、pp.49-54

- カノックワンラオハブラナキット(1997)『日本語学習者に見られる『断り』の表現—日本語母語話者と比べて—』『世界の日本語教育』7、国際交流基金、pp.97-112
- 蒲谷宏・金東奎・高木美嘉(2009)『敬語表現ハンドブック』大修館書店、p.8、p.112
- 高 揚(2019)『依頼に対する断りの談話展開に見られる配慮言語行動に関する一考察:日本語と中国語の対照研究の観点から』『ことば』40、現代日本語研究会、pp.160-177
- 白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版、pp.15-38、pp.138-139、p.187
- 高橋太郎(1993)『省略によってできた述語形式』『日本語学』12、明治書院、pp.20-26
- 曹 英南(2005)『字幕付き映画における韓日の言いさし表現の対応関係-「述部有り」の言いさし表現を中心として-』『言語文化と日本語教育』27、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp.102-115
- 朴 仙花(2012)『中国人日本語学習者による文末表現の使用に関する考察:断り発話を事例として』『言葉と文化』13、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化、pp.95-114
- 日高水穂(2012)『「察し合い」の談話展開に見られる日本語の配慮言語行動』『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房、pp.91-112
- 三原嘉子(1995)『接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察』『横浜国立大学留学生センター紀要』2、pp.79-89
- 村井卷子(2009)『「断り」行為において好感と不快感を決定する要因は何か-「スピーチ・レベル」と「方略」の二つの方策から-』『筑波大学地域研究』30、筑波大学大学院地域研究研究科、pp.17-30
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2018)『新版日本語語用論入門:コミュニケーション理論から見た日本語』明治書院、p.157
- 吉井千明(2009)『断り表現-親しさの度合いに着目し-』『東京女子大学言語文化研究』18、東京女子大学言語文化研究会、pp.70-86

논문투고일 : 2020년 12월 16일
 심사개시일 : 2021년 01월 18일
 1차 수정일 : 2021년 02월 05일
 2차 수정일 : 2021년 02월 14일
 게재확정일 : 2021년 02월 17일

 <要旨>

断り場面における言いさし表現に関する考察

- 言い切り表現との比較を通して -

小此木江利菜

本研究では、日本のドラマ資料を用い、断り場面に見られる言いさし表現を対象に使用様相をスピーチレベルの観点から考察した。課題としては、1)断り場面における「言いさし表現」の使用様相を「言い切り表現」と比較し分析する。2)観察された各表現を「丁寧体レベル」と「普通体レベル」のスピーチレベルに分類し考察することである。

まず、言いさし表現と言い切り表現を収集し分析を行った結果、断り場面が全330回見られ、その中で、言いさし表現は156回(47.3%)、言い切り表現は174回(52.7%)現れ、断り場面において言いさし表現より言い切り表現が多く使用されることがわかった。次に、観察された断り場面を「丁寧体レベル」と「普通体レベル」に分類した結果、「丁寧体レベル」においては言いさし表現が多く使用され「普通体レベル」では言い切り表現が多く使用されていた。このことから、言いさし表現のほうが丁寧度が高く「相手に対する配慮」を示す機能が含まれ、言い切り表現は丁寧度が低く「話し手の意図と態度」を明確に示したい心理が優先されると考えられる。

本研究では、断る際の文末形式や負担度別考察、断りに対する聞き手の察しに関する分析まで至らなかった。また、これらの結果から「依頼場面」や「誘い場面」においても同様の傾向が見られるのかに関する考察は今後の課題としたい。

A Study on the Refusal Scene with Interrupted Speech

- Through Comparison with iikiri Speech Expression -

Okonogi, Erina

In this study, using Japanese drama as data, the patterns of use in interrupted speech happening in refusal scenes were considered as the target in terms of speech level. This research investigated 1) interrupted speech and iikiri expressions' patterns of use when used in refusal scenes, 2) as well as classified each observed expressions as "polite" or "normal" form to analyze which relationship each exhibited in interrupted speech. In order to observe the pattern of use of interrupted speech in refusal scenes, interrupted speech and iikiri expressions were collected and analyzed first. As a result, a total of 330 refusals were made, of which 156 (47.3%) were interrupted speech and 174 (52.7%) iikiri expressions indicating that iikiri expressions were used more often than interrupted speech in the refusal scenes. Furthermore, the results of analyzing the observed refusal scenes in terms of speech level of "polite" and "normal" form have shown that interrupted speech was more frequently used in relationships with "polite" form than iikiri expressions with "normal" form. Through these findings, the researcher deduced that interrupted speech has a function of showing consideration to the interlocutor whereas iikiri expressions have a low level of consideration and clearly show their intentions to the other party. In this study, the patterns of use were considered from the perspective of speech level for interrupted speech in refusal scenes, however, the analysis of ellipsis at the end of an utterance in interrupted speech could not be reached. Based on these results, further studies should investigate whether "request scenes" and "suggestion scenes" present the same tendencies.